

ドイツ演劇・文学の万華鏡

岩淵達治先生古希記念論集

Das Kaleidoskop

— Theater und Literatur in den deutschsprachigen Ländern —

Festschrift
für

Professor Tatsuji IWABUCHI
zum 70. Geburtstag 1997

ドイツ演劇・文学の万華鏡

岩淵達治先生古希記念論集



江苏工业学院图书馆
藏书章

ドイツ演劇・文学の万華鏡
岩淵達治先生古希記念論集

一九九七年十二月二十七日第一刷発行

定価 本体八〇〇〇円(税別)

編集 岩淵達治先生古希
記念論集刊行会

発行者 近藤久壽治

発行所

株式会社 同学社

一二二 東京都文京区水道一ノ十ノ七

印刷所 研究社印刷株式会社

製本所 有限会社井上製本所

まえがき

長年にわたり学習院大学で教鞭を執るかたわら、広くドイツ演劇・文学の研究、翻訳に数多くの優れた業績を重ねてこられた岩淵達治先生が、この度、古希を迎えられることとなった。このお目出度い節目を記念してお祝いのために、先生の友人、知人、教え子など、有志が相集い、企画、編集したのが本書である。

岩淵先生のお仕事は本書に収録された著作目録からも明らかに看取れるように、誠に多岐にわたり多彩な内容を含んでいる。岩淵先生のお仕事のことなら充分存じ上げているつもりでいた我々ですら、こうして全体像を改めて概観すると、その圧倒的な豊かさに今更のように驚嘆させられる。日本におけるブレヒト研究を常に先導してこられた先生のご研究が、ブレヒトを主軸として展開されているのは、ある意味では当然のこととも言える。しかしブレヒトを起点として、或いはブレヒトと平行して、或いはブレヒトを超えて、幅広く展開される研究対象の遙かな広がりを見ると、先生の関心の在り方の多様さに思わず目が眩みそうになる。「演劇専門といわれるようになったため、映画、オペラ、舞踊などという関連領域も、自分からというより外から押しつけられる形で守備範囲になった」とは先生ご自身の言葉であるが、「守備範囲」などというものは本来「外から押しつけられ」たからといって、おいそれと広がるものではない。並の研究者では思いも寄らないような柔軟で貪欲な関心が、先生を突き動かしているのしか考えられない。「私はもともと学究肌の人間ではなく、演劇で（それも演出家としてではなく俳優で）身を立てようと思っていたので、今でも研究者といわれると良心が痛む」とはこれまた先生ご自

身の言葉であるが、先生一流の言い回しの妙があるので字義通り取るのは要注意だとしても、演劇に対する先生の関心の根本的な在り方について言えば、本音を漏らされているように思う。つまり岩淵先生にとつて演劇は研究の対象である以前に創造の対象であり、その意味でご自身、書斎人である以前に演劇人でいらつしやるのだ。演出家あるいは俳優としての実践活動を抜きにしては岩淵先生を語れないと言われる所以であろう。そして、ここが重要な点だが、岩淵先生のしなやかで貪欲な関心は、実は劇場人としての在り方に由来しているのではないかと我々は考えているのだが、いかがだろうか。

本音といえはしかし先生はまたこんな「本音」も漏らしておられる、「研究者の最低条件を満たさなければ、という強迫観念に追われながら、何度も急場を凌いできたというのが本音である」と。ところで「研究者の最低条件を満たさなければ、という強迫観念」とは裏返せば「研究者として誠実たんとする強靱な意志」の謂いにほかならない。演劇の実践家としてのしなやかで貪欲な関心の在り方が研究対象の広がり进行を促し、研究者として誠実たんとする強靱な意志が研究の質の高さを支えてきた、そう考えるのは図式的に過ぎるであろうか。いずれにせよこの二つの要素の絶妙なバランスこそが、先生のお仕事の魅力を産み出しているように思われてならない。一九九六年春、岩淵先生はドイツ連邦共和国政府より功勞一等十字勲章をお受けになられた。外国政府からの受勲はドイツ民主共和国（諸国民友好銀星勲章、一九九〇年）、オーストリア共和国（学問芸術功勞一等勲章、一九九二年）に続きこれが三度目である。質、量共に豊かなご研究の成果が、国境を越えて高く評価されている現れの一つと言えよう。今後もしよいよご健勝で、研究活動、実践活動にますますご活躍下さるよう、心から祈念する次第である。

本書の執筆者四十余名は、国籍を超えて、全員、岩淵先生の友人、知人、教え子の集まりである。しかし執筆のテーマは統一せず、執筆者各自の選択に委ねた。その結果、ご覧のようにまさに万華鏡そのもののような論集ができあがった。とはいえ演劇専門の先生のために寄せられた論文である、当然ドイツ演劇に関するものが圧倒的に多い。ドイツ演劇に関する著作が少ない日本の読書界の現状をふまえ、ドイツ演劇について、歴史的な主題から最新戯曲の情報にいたるまで、通覧できる本にしたいと考えておられた先生の当初のご希望にも、ある程度沿うことができたのではないかと考えている。全体をできるだけ読みやすくするために、原則として注や欧文の引用はなるべく避けることにした。また論文の中にはドイツではなく日本に関するものも含まれている。論文の掲載順は日本文、独文ともに原則として執筆者名のアルファベット順によった。

本書の刊行に当たっては、発起人をはじめ多数の方々から物心両面に渡って多大のご協力をいただいた。この場を借りて心から感謝の意を表したい。特に装幀については、朝倉撰氏の全面的な協力を仰いだ。また独文関係の校正・校閲については、ヴォルフガング・シュレヒト早稲田大学教授並びにフランク・ヴェークナー氏から多大なご助力を頂戴した。記して謝意を表したい。また出版については同学社の近藤久壽治社長をはじめ編集の薮純氏のひとかたならぬご援助、ご協力を受けた。心からお礼申し上げます。

一九九七年十月

目次

【和文の部】

まえがき

.....

編集委員会

i

*

*

*

〔和文論文〕

『ナポレオン——百日天下』

.....

阿部雄一

一

——グラツベ劇のへ裏の意味を求めて——

(中央大学非常勤講師)

井上ひさし作『数原検校』

.....

秋葉裕一

十五

——ひとつのベルトルト・プレヒト受容——

(早稲田大学教授)

ライムント劇における多様な民衆

.....

新井裕

三三

(中央大学教授)

演劇における省察

長谷川 悦朗

五一

——シラーのシェイクスピア受容をめぐって——

「人生は、ジェット・コースターだ」

橋 本 香 折

六五

——ヴェーデキントの『カイト侯爵』——

(同志社大学非常勤講師)

実現しなかった第三の国歌

早 崎 えりな

八一

——ドイツの国歌をめぐって——

(フェリス女学院大学非常勤講師)

教会への最後の歩み

五十嵐 敏 夫

九七

——エルンスト・トラー最後の戯曲『ハル牧師』——

(中央大学教授)

ノラが家に帰ることの意味

入 谷 幸 江

一一三

——エルフリーデ・イエリネクの戯曲『ノラが夫を捨ててから、

(東海大学教授)

何が起ったか あるいは 社会の柱』において——

共通の存在形態としての問い

狩 野 智 洋

一二七

——ハントケの『問いの技法』——

(立教大学非常勤講師)

トーマス・ベルンハルトとファシズム

桑 原 ヒサ子

一四一

——『ヘルデンブラッツ』(一九八八)は政治的作品といえるか——

(敬和学園大学助教授)

今日のホルヴァート上演 三 輪 玲 子 一五九

—— ドイチュエス・テアター『ウイーンの森の物語』を中心に——
(駿河台大学講師)

レッシングの人物造型 宮 永 義 夫 一七五

——『ミンナ・フォン・バルンヘルム』と
(山梨医科大学助教授)

『賢者ナータン』を手がかりに——

ブレヒトと寺山修司 中 島 裕 昭 一九一

—— 劇場における自我主義に抗して——
(東京学芸大学講師)

ゲアトゥルト・フッセンエッガーへの検閲 西 谷 頼 子 二〇九

—— 文学史『後世の者たちの検閲・第三帝国における
(愛知県立大学教授)

体制批判の文学』(一九五五)が暴く——

マリールイーゼ・フライサー『深海魚』 岡 田 啓 美 二二五

—— ある女流作家の従属と抵抗——
(学習院大学非常勤講師)

J・M・R・レンツの『演劇覚書』 岡 田 恒 雄 二四一

—— 否定の演劇論——
(明星大学教授)

フランス革命前夜におけるドイツ市民の悲喜劇 佐 藤 研 一 二五七

—— J・M・R・レンツの劇世界をめぐって——
(東北大学助教授)

ブレヒトとニューシネマ 澁谷 哲也 二七三

——継承される実験精神——
(東海大学非常勤講師)

市民的ヒューマニズムのアポリア 高橋 輝 暁 二八九

——シラーの『群盗』にみる四象限の構図——
(立教大学教授)

『清く、正しく、美しく』 高橋 智恵子 三〇九

——レッシングの『ミス・サーラ・サンブソン』
(洗足学園短期大学教授)

における等身大のパフォーマンス——

哄笑するテキストと記憶の劇場 谷川 道子 三二五

——ハイナー・ミュラーの遺作『ゲルマーニア3』
(東京外国語大学教授)

死者にとりつく亡霊たち——

ボート・シュトラウス『イタカ』におけるホメロス改作 寺 尾 格 三四五

(専修大学助教)

ホーフマンスタール『影のない女』をめぐって 津川 良太 三五九

(共立女子大学教授)

シュテファン・ハイムは悪質なスターリン主義者だったか? 塚田 眞幸 三七七

(神奈川大学助教)

諸芸術における創造性の破壊 ゴットフリート・ヴァーグナー 三九三

——画一化された音楽、ナチのイデオロギーと
(ジャーナリスト・演出家)

政治宣伝としての音楽——(ドイツ語レジュメは別掲)

演出家としてのリヒャルト・ヴァーグナー 吉 田 真 四〇三

(慶應義塾大学非常勤講師)

* * *

和文論文執筆者紹介 四一七

岩淵達治先生略年譜 四二三

岩淵達治先生著作目録 四二五

【独文の部】

あとがきに代えて 林 陸 實 (i)

(編集委員)

* * *

〔独文論文〕

日本におけるハイナー・ミュラー受容の一考察 …………… 岩淵 達 治 (一)

——個人的視点から——
(学習院大学教授)

フェルディナント・ライムントの『妖精王のダイヤモンド』 …………… 青 木 奈 緒 (二五)

——カルロ・ゴッツィの『精霊王ゼイム』との比較——

いまいちのアプローチ …………… ペーター・バイヤーデルファー (四一)

——ジョージ・タボーリの劇のプレヒトぶり——
(ミュンヒエン大学教授)

時間と空間の変遷 …………… エリカ・フィッシャーリヒテ (六一)

——二十世紀初頭のドイツ演劇による日本劇の生産的受容——
(ベルリン自由大学教授)

ドラマトウルギーと文学による教育 …………… ヴイルヘルム・ゲスマン (七一)

——ゴットホルト・エフライム・レッツィングの場合——
(元デュッセルドルフ大学教授)

ドイツ「フォーアメルツ」期における文学の機能転換 …………… 林 睦 實 (八一)

——ハインリヒ・ハイネの近代性を例に——
(早稲田大学教授)

ベルリン——東京 …………… ヴアルター・ヘーレラー (九七)

追憶のモメント ……………
(元ベルリン工科大学教授)

シュヴァーツにおける日本人劇 トーマス・インモース (九九)

(元上智大学教授)

学習と誤謬 ヤン・クノツプフ (二〇七)

(カールスルーエ大学教授)

演劇と記憶 ハンス・ティース・レーマン (二二二)

(フランクフルト大学教授)

舞踏 ノルベルト・マウク (二三三)

(演出家)

(二時的)後退としてのラジカリズム マイケル・モリー (二四五)

(フリンダース大学教授)

エスカレーターについて エーバーハルト・シャイフェレ (二六三)

(早稲田大学教授)

ドイツ語圏の現代文学 ラルフ・シュネル (二七九)

——現状把握の試み—— (ジーゲン大学教授)

多義的な飛行 ゲーニア・シウルツ (一九九)

——ブレヒトの『大洋横断飛行』についての覚え書き—— (チュービンゲン大学教授)

結末がどうなるか、議論しよう エルンスト・シューマツハー (二〇七)

「フンボルト大学演劇科におけるハイナー・ミュラー討論会の記録」 (元フンボルト大学教授)

諸芸術における創造性の破壊(レジュメ) ゴットフリート・ヴァーグナー (二三二)

(ジャーナリスト・演出家)

獅子と力士 ギュンター・ツォーベル (二三三)

——東北の武闘獅子を求めた柳田国男—— (早稲田大学教授)

* * *

独文論文執筆者紹介 (二四七)

岩淵達治先生略年譜 (独文) (二五三)

岩淵達治先生著作目録 (独文) (二五三)

Das Kaleidoskop

— Theater und Literatur in deutschsprachigen Ländern —

(Festschrift für Professor Tatsuji Iwabuchi zum 70. Geburtstag 1997)

INHALT

Statt eines Nachworts	i
<i>Deutsche Aufsätze</i>	
Tatsuji Iwabuchi : Zur Rezeption Heiner Müllers in Japan — aus persönlicher Sicht —	1
Nao Aoki : Ferdinand Raimunds „Der Diamant des Geisterkönigs“ im Vergleich mit Carlo Gozzis „Zeim re dei Geni“	25
Peter Bayerdörfer : Bedingte Annäherung — Zu George Taboris dramatischen Brechtliaden —	41
Erika Fischer-Lichte : Wandel von Zeit und Raum — Produktive Rezeption des japanischen Theaters durch das deutsche zu Beginn des 20. Jahrhunderts —	61
Wilhelm Gössmann : Dramaturgie und Literaturdidaktik — am Beispiel Gotthold Ephraim Lessings —	71
Mutsumi Hayashi : Zum Funktionswechsel der Literatur im deutschen „Vormärz“ — am Beispiel von Heinrich Heines Modernität —	81
Walter Höllerer : Momente der Erinnerung Berlin-Tokyo	97
Thomas Immoos : Die Japanesenspiele in Schwyz	99
Jan Knopf : Lernen und Irren mit Herrn K. — Zu Brechts Geschichten vom Herrn Keuner —	107
Hans-Thies Lehmann : Theater und Gedächtnis	121
Norbert Mauk : BUTHO — Impuls eines japanischen Phänomens —	133
Michael Morley : Radikalismus als (vorläufiger) Rückschritt — Zur Kipling- und Butler-Lektüre Bertolt Brechts —	145
Eberhard Scheiffele : Über die Rolltreppe — Zur Aufgabe einer materialen literarischen Hermeneutik —	163
Ralf Schnell : Deutschsprachige Gegenwartsliteratur — Versuch einer Bestandsaufnahme —	179
Genia Schulz : Vieldeutiges Fliegen — Anmerkungen zu Bert Brechts „Ozenaflug“	199

Ernst Schuhmacher : Wir machen Dinge, von denen wir nicht wissen, was sie sind — Heiner Müller im Gespräch mit Teilnehmern des Brecht-Oberseminars im Bereich Theaterwissenschaft der Humboldt-Universität am 13. März 1984 —	207
Gottfried Wagner : Die Zerstörung des Schöpferischen in den Künsten: Gleichgeschaltete Musik: Nazi-Ideologie und Musik als politische Propaganda (Zusammenfassung)	231
Günther Zobel : SHISHI und RIKISHI — Mit Yanagita Kunio auf der Fährte des kämpferischen, Löwen‘ in Tōhoku —	233
Über die Autorinnen und Autoren	247
Lebenslauf des Jubilars	253
Eine Liste der Leistungen vom Jubilar	253



Vorwort der Redaktion	(i)
<i>Japanische Aufsätze (Titel in deutscher Übersetzung)</i>	
Yūichi Abe : „Napoleon oder die hundert Tage“ — Auf der Suche nach einer ‚tieferen Bedeutung‘ in Grabbes Dramen —	(1)
Hirokazu Akiba : „Meister Yabuhara“ von Hisashi INOUE — eine Rezeption von Bertolt Brecht —	(15)
Yutaka Arai : Die Volksfiguren in Ferdinand Raimunds Werk	(33)
Etsurō Hasegawa : Reflexionen im und über Theater — Die Shakespeare-Rezeption bei Schiller —	(51)
Kaori Hashimoto : Das Leben ist eine Rutschbahn . . . — Frank Wedekinds „Der Marquis von Keith“ —	(65)
Erina Hayasaki : Die dritte, unverwirklichte Nationalhymne	(81)
Toshio Igarashi : Die letzten Schritte zur Kirche — Ernst Tollers letztes Stück „Pastor Hall“ —	(97)
Yukie Iritani : Über das Drama „Was geschah, nachdem Nora ihren Mann verlassen hatte oder Stützen der Gesellschaft“ von Elfriede Jelinek	(113)
Toshihiro Karino : Die Frage als eine gemeinsame Daseinsform — „Die Kunst des Fragens“ von Peter Handke —	(127)
Hisako Kuwahara : Thomas Bernhard und Faschismus — „Heldenplatz“ (1988), ein politisches Drama? —	(141)

Reiko Miwa : Wie aktuell ist Horváth heute? — Anhand einer Aufführung der „Geschichten aus dem Wiener Wald“ im deutschen Theater Berlin —	(159)
Yoshio Miyanaga : Figurenbildung bei Lessing — „Minna von Barnhelm“ und „Nathan der Weise“ —	(175)
Hiroaki Nakajima : Bertolt Brecht und Shûji Terayama — Gegen den Solipsismus im Theater —	(191)
Yoriko Nishitani : Die zensierte Schriftstellerin Gertrud Fusseneger — Die Literaturgeschichte: „Die Zensur der Nachgeborenen. Zur Regimekritischen Literatur im dritten Reich“ (1995) von Friedrich Denk hat sie rehabilitiert. —	(209)
Hiromi Okada : Marieluise Fleißers „Der Tiefseefisch“ — Schriftstellerin im Drama —	(225)
Tsunco Okada : „Anmerkungen übers Theater“ von J.M.R. Lenz — Sich selbstzerstörende Dramentheorie —	(241)
Ken'ichi Satô : J.M.R. Lenz. — Die Tragikomödie des deutschen Bürgers am Vorabend der Französischen Revolution —	(257)
Tetsuya Shibutani : Brecht und New cinema — Experimenteller Geist als Erbschaft —	(273)
Teruaki Takahashi : Aporie der bürgerlichen Humanität — Die Konstellation der vier Hauptfiguren in Schillers „Räuber“ —	(289)
Chieko Takahashi : Die bürgerliche Moralität auf der Bühne — Zu Lessings „Miß Sara Sampson“ —	(309)
Michiko Tanigawa : Schallendes Lachen im Theater der Erinnerung — Heiner Müllers letztes Stück „Germania 3 Gespenster am toten Mann“ —	(325)
Itaru Terao : Über die Bearbeitung der „Odyssee“ im Theaterstück „Ithaka“ von Botho Strauß	(345)
Ryôta Tsugawa : Notizen über „Die Frau ohne Schatten“ von Hugo von Hofmannsthal	(359)
Masaki Tsukada : Ist Stefan Heym ein wirklicher Stalinist gewesen?	(377)
Gottfried Wagner : Die Zerstörung des Schöpferischen in den Künsten: Gleichgeschaltete Musik: Nazi-Ideologie und Musik als politische Propaganda (Übersetzung)	(393)
Makoto Yoshida : Richard Wagner als Regisseur	(403)